

---

# メイ探偵の事件簿

ガラクタ・エントツ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

メイ探偵の事件簿

### 【Nコード】

N36790

### 【作者名】

ガラクタ・エントツ

### 【あらすじ】

” 推理小説を読む会ではありません。事件を解決する探偵同好会です”

自称 探偵同好会 会長の宮下五月が、仲間と共に学校内外の事件に首を突っ込んでいく。

彼らを待ち受ける事件とは？

【届かない手紙】 第1話（前書き）

” 推理小説を読む会ではありません。事件を解決する探偵同好会で  
す”

自称 探偵同好会 会長の宮下五月が、仲間と共に学校内外の事件  
に首を突っ込んでいく。

彼らを待ち受ける事件とは？

## 【届かない手紙】 第1話

昼休みの調理準備室。

普段、昼休みの調理準備室は、料理部の部室（溜まり場）として使われているのだが、今日は料理部とは関係ないことで、数人の生徒が集まっている。

探偵同好会の活動である。

料理部の2年生は、探偵同好会（非公認）を兼任していて、活動の場として調理準備室が使われているのだ。

探偵同好会と言っても、推理小説を読む会ではない。

学校内外の事件に首を突っ込み解決する探偵同好会だ。

そして、料理部に入ったはずの私、千堂茜も、いつの間にやらそのメンバーに含まれていた。

「ラブレター以外は盗まれていないんですよ。

そんなのまた書けばいいじゃないの。それに、どうせなら直接告白すれば。

もう一度書く手間も省けるし」

髪の毛がぼさぼさな高校生、小森明は、私を見上げ、不思議そうに呟いた。

そして、再び弁当を食べ始めた。

さすが、小森、年齢イコール彼女居ない暦だけはある。

このままだと、寿命イコール彼女居ない暦は確実だろう。

「それで済んだら、あなたになんか相談しないわよ。

それに何よ。あなたのその態度。

あんたね。乙女は恋に命を懸けているのよ」

私の隣に居るポニーテイルの小柄な少女が、体格からは考えられない凄腕で小森を攻めた。

探偵同好会会長の宮下五月だ。

それに対して、小森は「ふうん」と気のない返事だ。

命を懸けるのならばもつと有意義なものに．．．そんな言葉が喉元まで出ているような表情を小森はしている。

だが、何も言わない。

反論したい気持ちはあつたが、これ以上言つと何を言われるか判らないので止めたといったところか。

触らぬ神に祟りなしということなのだろう。

彼としては賢明な判断だ。私たちの日ごろの教育の賜物だろう。

「それにね、人が話をしているときは、弁当なんか食べないで、ちゃんと話を聞くのよ」

宮下の剣幕は続く。

もつとも、いくらすごい剣幕でも、ポニーテイルに少したれ目のせいか、怖いというより可愛いと感じてしまう。

標準よりかなり大柄な私、千堂茜には出来ない芸当だ。

自分では、そうは思わないのだが、私の場合は何でも和田 子並みに恐ろしいらしい。

確かに、シヨートヘアーだし、細身だ。しかも、身長は和田

子よりも大きい、180センチだ。

子と呼ばれないためにも、ここは大人しく見ていよう。

「わざわざ、あんたを昼休みに部室に呼んだんだから、きっちり、協力してもらおうよ」

宮下は、私でも無茶苦茶なことを言っているなと思うような言葉で、小森に協力を依頼した。

隣の調理室で待たせていた、依頼人と紹介者を準備室に呼び、事件の概要を小森に説明した。

事件の概要は簡単だ。

昨日の三時限目の体育の授業の間に、机の中に置いておいたラブレターが盗まれたのだ。

ラブレターを書いたのは、隣クラスで宮下の知り合いの西村智子。目立たないが、ロングヘアーの小さい可愛い女の子だ。

小森によると、男たちの間でも、それなりに可愛いほうの部類に入るほうらしい（噂）。

そして、ラブレターの宛先は、大沢健二というクラスメイトだ。取り立てかっこいいということはないが、テニス部所属のスポーツ好きの好青年といったところだ。

スポーツ青年らしく爽やかさがあり、何よりも2年生の中ではレギュラーだ。

好意を示している女性は何人か居るが、特定の恋人は居ないようだ。

その日、告白を決心した西村さんは、ラブレターを放課後に手渡すか、机、ロッカーに入れるつもりで、机の中に置いておいた。

しかし、三時限が終わった後に、机の中を調べたら、無くなっていたのだ。

小説とかに出てくる殺人事件に比べれば、格段に深刻度は落ちる。しかし、こちらは現実。小説の中の殺人事件よりもよっぽど深刻だ。事実、少しは落ち着いて来たとは言え、隣に居る彼女は、今も多少自失気味である。

そんな彼女を見るに見かねたのが、クラスメイトで、私とも西村さんとも友達で紹介者である鈴木さんだ。

見た目もメガネにショートボブと少し委員長中風で、クラス委員長をやつてこそいないが、中身も少し委員長風だ。

そんな鈴木さんは、私と宮下さんに相談を持ちかけて来た。

なぜ、私に相談を持ちかけたのか、と言うと、私と宮下さんが、

たびたび事件に首を突っ込んで、事件を解決していたからだ。

もつとも、事実は少し違っていて、私たちの手に負えなかった難事件、怪事件は、この一見頼りなく、事実たよりない小森が解決しているのだ。

そう、この事件は一見簡単そうなのだが、私たちは行き詰ってしまったのだ。

ともあれ、もしかすると謎を解いてくれるかもしれない、と私たちは隣のクラスから昼休み中の小森を引っ張り込んだのであった。

【届かない手紙】 第2話

「無くなったのは、三時限に間違いないと」

「二時限と三時限目の間の休み時間に一度確かめたら間違いないです。」

それに、三時限目の体育が終わったときには一番初めに部屋に戻りましたから」

「なんで机の中に入れたの」

「朝一番に来て机に入れとこうと思ったんですけど、中田君が先に来ていて、朝来たときに、勇気を出して入れておけば、事件なんか起きなかつたのに・・・」

西村さんはさらに自分を責めて落ち込んでしまう。

「他のものは何も盗まれていないんだよね・・・」  
「ええ」

「物的証拠や目撃証言は期待できそうないかな」と宮下に尋ねる。

「盗まれたものが特殊なものだからから人間関係から考えていくのが一番だと思うのよね」と宮下。

「当然、人間関係は、既に調べているんだよね」  
「もちろんよ」

「じゃあ、だいたい、犯人の目星はついてるんでしょ？」

「西村さんと同じ2・Bの大塚さんよ」と宮下が答えた。

大塚さんは、ソバージュのロングヘアの長身の女の子だ。

私の知る限り、彼女は悪い人ではない。むしろ、姉御肌でリーダーシップがある人だ。

ただ、少し気が強いかもしれない。その気の強さを嫌がる人は居るかもしれないが。

「彼女はいったん部屋に戻っていて、体育に遅れてきたの」

「機会はあるわけだ。動機は？」

「大塚さんも、大沢君を好きなのよ」

「西村さんの告白を妨害するために、ラブレターを盗んだって言うのかい」

「そうよ」

「でも、何か、大塚さんが犯人とは断定できない、理由でもあるでしょう」

「証言者がいるのよ。大塚さんがやっていないという」

「そう、私たちの調査は順調に行っていたのだが、たった一つの事実で行き詰まってしまった。」

「誰だい」

「大沢君よ」

「これはこれは」と小森は、嬉しそうに目を輝かせた。

一方、鈴木さんは小森のその表情を見て、不満げだ。

どうも、小森が人の不幸を楽しんでいるように見えたのだろう。

そもそも、鈴木さんは女の子の問題を男である小森に話すを好ましく思っていないかった。

それを私と宮下さんが説き伏せ、西村さんが承諾して、鈴木さんも折れた。

「大沢君も教室に忘れ物を取りに行っていて、大塚さんが部屋に入った直後に、部屋に入ったらしいのよ」

「ずいぶん、みんな忘れ物をしているんだな」

「そうね、そこが胡散臭いんだけど」

「大沢君は大塚さんが取ったところを見てないわけだ。」

「見ては、いないわ」

「直後で行っているけど、何秒くらい後」

「5秒くらいかしら」

「大沢が教室に入ったとき、大塚さんは、どこにいたの？」

「大谷さんは自分の席に居たそうよ。大谷さんの机は窓際が一番後」

る、それに対して、西村さんの席は反対側の入り口側の一番前」

「なるほどね。大塚さんには取る時間はないわけだ。大沢君と大塚さんの証言は一致していた？」

「ええ、一致してたわ」

「大沢君と大塚さんは、一緒に部屋を出て授業に戻ったの」

「そうよ。だから、大塚さんが戻って取りに行くのは無理なのよ」

「教室の出入りはそれで間違いないの？」

「それ以降、部屋に入った人間も出た人間も居ないはずよ」

「まだ、ラブレターは見つかってないんだね。ゴミ箱とか探した？」

「探したわよ。茜ちゃんと手分けして外や焼却所まで探したんだから。ねえ」

私は大きく頷いた。

「ゴミの山を探るのは、嫌だったが、宮下さんの事件解決にに対する情熱に負けてしまった。」

「ご苦労様です」

小森のその言葉に心はこもっていなかった。

「ラブレター以外に盗まれたものはないそうだけど。悪戯とかは、されていないの」

「ありません」

西村さんが嘘を言っているような感じはない。

「うーん、詰まったね」

「だから、あんたに、相談しに来たのよ」

「判った？」と私は多少の期待を込めて小森に尋ねた。

「ぜんぜん」

「駄目じゃない」と宮下。

西村さんには失望が、あまり乗り気でなかった鈴木さんには、怒りを抑えているように見える。

「ところで、西村さんはどうして、大沢が好きなの」

小森は突然話を切り替えた。

「それ事件に関係あるの」の私。単に興味本位で聞いているとしたか  
思えなかった。

「あるさ。大有りだよ」

「・・・やさしいところかな・・・」

「やさしいところ？どうして優しいと思うの？」

「うーん、クラスの行事のときとか、いろいろと手伝ってくれたし  
・

」

「なるほどね」と小森は、あいづちを打った。

その直後、私と宮下の顔を見た。

そんなことで人を好きになるのかといった表情だ。私と宮下は軽  
く頷いた。

それを見て、小森は少しは納得したようだ。

「2、3調べることもあるけど、そうだな、今日の放課後に結論が  
出るかもしれない」

「ええ、判ったの。先までは、全然判らないって言ったに」と鈴木  
さん。

「まあ、これは推理小説じゃないからね。そんなに難しくくないよ。

そうだね。6時に、この教室で教えるよ。ヒントが大塚さんの机」

「いまじゃないの」と宮下。自分が解けなかった問題を小森が解け  
たと言ったので、すこし悔しそうだ。

「2、3調べることがあるって言ったでしょ。期待しすぎてもらっ  
ても困るけど、それなりに期待して、待っててよ」と小森は悪戯っ  
子みたいな笑顔を浮かべた。

【届かない手紙】 第3話

西村さんと鈴木さんを連れて、宮下と千堂は放課後の誰も居ない教室を訪れた。

「小森、いないじゃないか」

「私たちが遅れて来たから、怒って帰ってしまったんじゃないですか？」とすまなそうな西村。

「気にしなくていいのよ、西村さん。どうせ、また、遅刻ね。あいつ時間にルーズだから」

「そうなんですか」と鈴木さん。

「そうよ。だからあいつと待ち合わせるときは、30分早く言うようにしているの」

「それより、ヒントが大塚さんの机って、どういうことからしら」

「時間もあるし、ちよつと調べてみましょうか」

「でも・・・」と西村。

「いいじゃない、事件解決のためよ」と宮下。

しかし、調べても何も判らなかった。判ったのは、大塚さんが落書きもせずに、机をきれいに使っていることぐらいだ。

「何か、見つかったかい？」とどこからともなく小森の声が聞こえる。

反対側の部屋の隅にあるカーテンが揺らめくと、小森がカーテンの後ろから現れた。

「何やってるの？」

「見たとおり、隠れていたんだよ。遅刻せずに、君たちよりも早く来てね」と私たちの方に近づいてくる。

「ところで、犯人が判ったら、どうするつもりなの？ 犯人を責めるの？」

「当然でしょ」

「・・・それじゃ、犯人を言うわけには行かないかな」

「なんで犯人を庇うのよ。あんたの知り合いなの」

「・・・まあ、そんなところだ」

「吐け。吐かないと」と私は小森に詰め寄る。というよりも、既に小森の襟元を掴み、首を絞めている。

後で聞くと、『ひよつとして、私たちは今新たな事件の目撃者？』と鈴木さんたちは思った、そうだ。だが、この時は、とりあえず事態を見守っていた。

「お、お」

「ハッキリ言えよ。聞こえないぞ」

「大沢だよ」

私は、小森から手を離れた。

「大沢君が何で」と西村は信じられないという表情だ。

「大沢も、西村さんのことが好きなんだよ」

その言葉を聞いた瞬間、西村の表情が赤くなった。

事の次第はこうだ。

西村さんのことを好きな大沢は、西村さんにラブレターを出そうと思い、西村さんの机の中を見た。ところが、別の手紙が入っていた。悪いとは知りながら、気になって手紙を取って見たところ、ハートマークの付いた手紙だ。誰かが西村さんに出したのか？それとも、西村さんが出そうとしているのか？彼は、思わず破いてしまった。そんなときに、廊下から誰かが近づいてくる足音が聞こえたんだ。彼は戻すにも戻せず、困ってしまい、手紙を持ち出してしまったのだ。

「でも、大沢君は塚本さんの後に入ってきたんじゃないの」

「大沢は部屋に隠れていたんだよ。居ないという先入観があるから見えないものさ。それに、扉を開けて現れれば、勝手に扉を開けて入ったと想像するし」

「そんな簡単な方法で隠れられるの」

「現に、僕に気がつかなかったじゃないか。それにもう一人にもね」  
教壇の中から背の高い青年があらわれた。  
大沢君だ。

西村さんを見ると、今まで以上に顔が赤くなっている。そして、  
大沢君もだ。

「もう、僕にやることはないね。」

そう言っつて、頭をかきながら小森は教室を出て行った。

小森の言う通りだ。私たちも二人を置いて教室を出て行った。

「それにしても、大塚さんは何をやってたのかしら」と私は小森  
に聞いた。

「それは探りを入れるためでしょ。西村さんの行動がおかしかった  
んじゃないの。女性の勘は鋭いから」

「あつ、聞き忘れた」

まだ腑に落ちない事があるのだろうか、宮下は小森を追って走り  
出した。

「待った。ちょっと待て、小森！」

追いかける宮下に、小森は億劫そうに立ち止まり、振り返った。

「まだ何か？僕はお腹が減ってるんだ」

「一つだけ。一つだけ聞きたい事があるんだけど」

「何？」

「どうして、大沢君が怪しいと思ったの」

「なんだ、そんなことか。僕が一番初めに疑問に思ったのは、君た  
ちと同じように、何でそんなものを盗んだかだよ」と小森は得意げ  
に説明し始めた。

「いいかい。犯罪っていうのは、悪意だけで起きるとは限らないと  
いうことだよ。ほんの偶然やお節介という善意で起きることだって

あるんだ。例えば、第3者の人間が代わりに出したとかね。だから僕は、大塚さんとかを最初に疑ったんだけどね。大沢に探りを入れたいところ、大沢は貰ってはいないことが判ったんだだけ、返答の態度が微妙だったんだ。そりゃそうだよな。本人は直ぐにでもOKしたいのにできないんだから」

「だったら、私たちが行った時に、すぐに、名乗り出れば良かったのに。そうすれば、こんなに大騒ぎにならなかったのに」と私。

「そんなことも、判らないの」と小森

「・・・？」

私には小森が何を言わんとしているかが良く判らなかつた。

「人の机を無断で探って手紙を開けるなんて、印象を悪くしかねないだろ。それに大沢くんは、西村さんから直接ラブレターを貰いたかつたんだろ。いろんな意味で」

「そうですね。妙に変なところで駆け引きをしてしまうんですよ。お互い素直になれば上手く行くのに」と鈴木さんが答えた。どうやら、鈴木さんの中で小森に対する評価が一変したようだ。

「その通り。通常なら差ほど気にしなく良いものも、異常に気になつてしまつて正常な行動ができない。恋する乙女の心理が微妙なように、恋する青年の心理も微妙だということだよ。さすが、鈴木さん。彼氏が居るだけあるね。まあ、君たちは男性心理は、まだまだだ・・・」

「どうやら、小森は自分の言っていることと立場をまだ十分理解していないようだ。」

「えっ・・・あっ・・・ちょっと、待った・・・」

小森が、この後、どうなったかは言うまでもない。

【届かない手紙】 第3話（後書き）

大昔に書いた小説です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3679o/>

---

メイ探偵の事件簿

2010年12月14日03時55分発行